

「絵画とは何とむなししいものだろう。本物そっくりだというのが称賛されるが、その本物はおよそ称賛されたものではないのだから」意識すればそんな警句がパスカルにある（『パンセ』Ⅱ、134）。俳句好きの日本では、とかくこんな警句を見ると、それだけで参ってしまう。だが、とナタリー・エニックは食い下がる。それではここで何が問題になっているのか。一見すると本物への「類似」を事とするのがけしからん、と読めるが、ケシカランのはむしろ「類似」が人々に「称賛」の念を惹起せしめることではないか。

そもそも、なぜ「称賛」されるのか。その背景には、類似の度合いが価値を左右する、という暗黙の前提がある。絵とモデルの近さ、signifiantとsignifiéのあいだの透明さを良しとする立場、表象行為を表象される対象objetに従属させること。それはパスカルにあっては、ポール・ロワイヤルの記号論に依拠する、神学的価値判断でもあっただろう。

とはいえ、本物が「称賛」に値する主題sujetだってあるだろう。即ち宗教画、神話画、歴史画だ。それらの範疇は、事物の記述では

## 道取 ● 芸術の空しさとは

制度と栄光の弁証法

三浦大宇・フランシス文学

和  
柘  
賀  
繁  
美  
Natalie Heinich

なく、舞台上演じられていた演説＝言説discoursを叙述する絵画ゆえに「高貴」と見なされる。とすれば、パスカルが批判の矛先を向けたのは、当時流行をみていたオランダ静物画の「この世のはかなさ」vanitéの寓意、ということになる。それをフェリビアンがアカデミーにおいてマイナーなジャンルと位置付けるのは、パスカル死後5年を経た1867年のことだった。つまりパスカルは一見哲学的な議論をしているようで、実は当時進行中だったある社会的価値観確立に加担していたことになる。

王立アカデミー形成にもなる価値観の変貌の中にパスカルを踏まえなおすこの論考の背景をなす博士論文で、エニックは画家がいかにして芸術家の範疇に出世したか、「職人からアカデミー会員」への変貌を分析した。この才媛はまた『ゴッホの栄光』の人間学的分析も試み、目下小説に現れた19世紀の画家像を遡している。邦訳出版も待たれている。

Nathalie Heinich, *Du Peintre à l'artiste*, 1993; *La Gloire de van Gogh*, 1991. 出版社はともに、Paris, Les Editions de Minuit.